

創刊の辞

「満洲の記憶」研究会編集委員会

「満洲の記憶」研究会はこの度、ニューズレター『満洲の記憶』を刊行することとなった。本誌の創刊にあたって、本会の設立経緯や目的、主な活動内容について紹介したうえで今後の展望を述べたい。

まず本会の設立経緯を紹介する。本会結成のきっかけの1つとなったのが、編集委員会のメンバーの一部が一橋大学佐藤仁史ゼミの一環として行ったいくつかの活動である。佐藤ゼミでは中国東北地方の歴史に関心を持つ学生が複数いたため、ゼミの活動の一部として、2011年末から2012年にかけて中国残留邦人に対し計6回12時間以上に及ぶインタビューを実施した。このインタビューでは、満洲経験者に対して口述調査の手法を実践するとともに、「満洲国」時代から1980年代にいたる中国東北地方の生活史を聞き取ることができたのが成果であった。また2012年3月には、佐藤ゼミの有志が台湾中央研究院の林志宏氏とともに中国東北各地の現地調査を企画した。これらの活動を通じて、記述史料を補うものとしてのオーラルヒストリーの可能性や、引揚者が個別に所蔵する文献の収集・保存活動への重要性・緊急性を認識するに至った。

インタビューや文献収集の重要性・緊急性とは、満洲経験者の高齢化や引揚者団体の解散にともなって、様々な記憶や記録が散逸しつつある現状を指す。戦後70年を迎え、失われつつあるのは満洲経験の記憶のみならず、手記や写真、回想録などといった種々の史資料も含まれている。廃棄されたり、整理されぬまま埋もれたりしている史資料が相当あることが関係者との交流の中から明らかになった。このような状況に対して、本会編集委員会の菅野智博と湯川真樹江は、満洲経験者に対する聞き取りや民間に散在する史資料収集を進めるために、様々な満洲帰国邦人団体の会合に参加しながら、活動に賛同する若手研究者や大学院生を募って共同研究を進めることを着想した。そして2013年7月に本会を結成し、満洲に関わる様々な記憶を体系的に収集・分析しつつ、その成果を関係者に発信していくことを活動の趣旨とした。

本会が様々な記憶を収集するにあたっては、蘭信三、井村哲郎、加藤聖文、坂部晶子、山本有造などの諸氏によって進められてきた満洲引揚者・中国残留邦人のライフヒストリー研究や関係史料の整理・編纂に関する研究蓄積や手法から多くを学んだ。その上で、近現代中国東北

地域史と戦後史との連続性を追究した聞き取り調査や民間に散在している団体・個人の史資料の収集の2点に力点を置いて活動を進めている。結成後から現在に至るまで進めてきた本会の活動内容の詳細については本号掲載の「2013年度『満洲の記憶』研究会活動記録」を参照されたい。その活動内容は以下の①～③に大別することができる。

① 満洲経験者へのオーラルヒストリー調査を通して、様々な記憶を収集・記録すると同時に、記憶のあり方や継承方法について検討する。

② 団体や個人が所蔵する様々な関連史資料を収集し、その整理や保存を行う。

③ 研究成果を国内外の学界や一般市民に積極的に発信する。

①については、これまでの1年間(2013年8月～2014年7月)において、本会は多くの満洲経験者のライフヒストリーをうかがうことができた。この活動においては満洲の多様性をより浮き彫りにするために、各都市関係者(大連、新京、ハルビン、龍井など)、開拓団関係者、中国残留邦人、満洲国軍関係者など多岐にわたる対象者に詳細な聞き取りを実施してきた。

②については、様々な団体や資料館、個人の協力のもとで史資料の収集・整理を行ってきた。関東周辺地域のみならず、三重県、岡山県、山口県、大分県など全国にわたって活動を展開した。本号掲載の「大連神社記念資料館所蔵文献目録」

はその重要な成果の1つである。

③については、関係者のご厚意により近現代東北アジア地域史研究会の『News letter』や、台湾国史館の『国史研究通説』などに研究会の活動内容や成果の一部を紹介する機会を頂いた。また本会では今後、インタビュー記録や史資料収集の状況、目録作成状況などの活動成果を本誌に掲載し、国内外の関係者に積極的に提供していきたいと考えている。

最後に本会の今後の展望について簡単に述べておく。本会では、今後も継続して聞き取り調査や史資料の収集・整理に力を注いでいく予定である。前者については、個々の経験者への丁寧な聞き取りを行うと同時に、地域や職業、学校、年齢などの違いにも注目し、満洲の記憶の多様性を明らかにしていきたい。後者については、団体や個人所蔵の貴重な史資料が継承されるよう各地に赴いて収集・整理・保存活動を進めていく予定である。この2つに加えて重視しているのが研究成果の発信である。活動のなかで得られた様々な記憶や記録を多くの研究者や一般市民が利用できるよう、口述記録や目録などの形で公開していくことを目指している。また、満洲の記憶を多角的な視野からとらえるために、中国近現代史のみならず、ロシアやモンゴル、朝鮮、日本をフィールドとする研究者とも交流したい。そのための場として定期的に例会を開催し、学術交流を進めることも予定している。

本会の発足から1年半が経過した。本誌を刊行することができたのは関係者各位のご厚意・ご理解によるところが大きい。この場を借りて心より感謝の言葉を申し上げる。若手研究者が主体でたちあ

げた研究会であるのもとより至らない点は多々あるかと思われるが、若手の強みを生かして積極的に活動を展開していきたい。